

重症心身障害者の社会参加を促す集団活動に対する知識科学的考察

林 志生
(Shio HAYASHI)

【要約】

重症心身障害者が地域で暮らすことの重要性は言われているが、外出先の確保に留まっていることが多い。これに対し、ある通所施設では、アルミ缶の回収活動の発展を通して、施設利用者、職員と地域住民の交流が図られてきた。

本研究では、この活動を知識科学の立場から考察し、各活動当事者の経験の蓄積から得た暗黙的な現場の知識が、活動の段階的発展を通じて、単なる交流ではなく、関係性の深化や社会性促進という新しい知識を創造してきたことを見出した。

この「暗黙知」を「形式知」として表出することで、当事者にとっての新たな目標設定になると同時に、他の組織での活用が期待できる。また、この活動は障害者が暮らしやすい地域社会を作り出す試みにもなっており、この活動を体系化しノウハウとすることで、新たな知識創造に繋がると考えられる。さらに、これらを地域作業療法の知識とすれば、作業療法の実践にも貢献できる。今後とも、この施設の集団活動の知識創造を体系化・一般化していく。

キーワード：重症心身障害者、作業活動、社会参加、知識創造、暗黙知

1. はじめに

「障害者が地域で暮らす」ことが重要であると言われて久しい。その重要性に関して国際生活機能分類(ICF)導入により「社会参加」という面にも焦点が当てられるようになっており、国際作業療法士連盟の作業療法の定義の中に地域・環境に対する働きかけが作業療法の一部とされた¹⁾。また、地域作業療法の中でも実践を通して「生活しやすい地域づくりを目指す」考え方が²⁾。しかしながら、現時点では、「家にこもりきりにならない」、「外出機会が確保されている」ことを「社会参加」としてはいただろうか。たしかに、多くの障害者にとって、外出機会を確保することは容易で無く、簡単には実現できていないのが実状である。通所先を確保しても、家との往復や、施設職員・メンバーとの交流、外出活動にとどまっていることが少なくない。そのような障害者の通所施設の活動は、必ずしも地域で暮らすことに繋がらないことが多

いように思われる。

そこで、「障害者が地域で暮らす」という真の意味を明らかにするために、障害者における作業活動のもつ意味と障害者の社会参加について、重症心身障害者の社会参加に取り組んでいる通所施設の実践に対して知識科学的視点から検討をおこなった。本研究は目白大学倫理審査委員会の承認を受けておこなわれている。

2. 事例紹介

本研究の対象施設は、重症心身障害者の通所施設という制度がまだなかった1986年に、知的障害者通所更正施設として定員40名で開所し、今年24年目を迎えた通所施設Aである。重症心身障害児が通学していた訪問学級の卒後の受け皿としての障害者地域作業所からの歴史を入れると30年になる。医療的ケアを必要とする人々も多く通所している。

通所者(以下、メンバーとする)は、日常を過ごす

10人程度の5つのグループに分かれており、図1に示すような活動を行っている。おおむね、午前中にグループ単位での主活動(図1)、午後は全体での活動やグループ単位でのお楽しみ活動となっている。

グループ1：和紙染色・製品作り グループ2：クッキーを中心としたクッキング グループ3：ジャム作り・音楽活動 グループ4：アルミ缶回収 グループ5：アルミ缶回収・バンド活動
--

図1 各グループで行われている主な活動

本研究では、アルミ缶回収をおこなっているグループ4に焦点をあてた。アルミ缶回収グループは曜日によって、異なったコースを回っている。天候、回収先までの距離によって、回収先近くまで自動車で移動し、近隣のみ徒歩で回収に行くこともあれば、施設から徒歩・車いすで出かけることもある。また、グループ全員が毎回出かけるわけではなく、体調、本人の意思などにより、施設に残るメンバーもある。

地域の協力者が回収日に合わせて、自宅前の通りに面した塀、生け垣などにアルミ缶の入った袋を掛けて回収に協力する、という形態をとっている。回収に向いたメンバーは、呼び鈴を鳴らし、在宅であれば、顔を合わせ、礼を述べて缶を受け取る。通りから手の届くところにアルミ缶が出されていても、協力者から直接手渡してもらうことを大切にしている。不在であれば、缶の入った袋を回収する。その際に施設から定期的に発行しているニュースや行事のお知らせのチラシなどあれば、お礼の一言を書き込み、郵便受けに投函し、コミュニケーションの一助としている。

施設内に残ったメンバーは、アルミ缶をつぶす機械を操作して、回収された缶を保管しやすいようにつぶしている。一般の缶つぶし機では操作できないために、授業の一部で施設を訪れた工学部の大学生ボランティアによって、それぞれの身体機能で操作できるように、工夫が加えられている。

このようにして回収したアルミ缶は月に1度、リサイクル業者に持ち込み、換金している。

3. アルミ缶回収活動の展開

そもそもアルミ缶回収の活動はいかに始まり、発展してきたのか、から分析する。

およそ10年前にこの活動は始まった。当初、ボランティアや職員が、家を出たアルミ缶を施設に持ち寄り、それをつぶして保管、換金するといったことが主で、アルミ缶つぶしにメンバーが関与できる部分を作るといった試みがなされていた(図2：第1段階)。

それを、近所のボランティアに施設に持ち込んでもらう代わりに、メンバーが取りに行く形態に変更を加えた。もともと、この施設では開設以来、なるべく外に出るということに心がけていたそうであるが、決まった曜日に、決まったところへ出かける明確な目的が新たに加わった(第2段階)。

毎週、決まった曜日に出かけることで、その近隣の住民からも、「うちにも取りに来てほしい」と声がかかるようになり、アルミ缶を提供する家が出てきた。住民へ積極的に依頼したわけではないが、毎週出かける様子を地域の方が見ていてくれたのではないかと職員は推察している。これらの家に出向き、呼び鈴を鳴らし、アルミ缶を受け取り、言葉を交わす。この最初の時点では、近隣の人が言葉を交わしたり、アルミ缶を手渡したりするのは、障害を持つメンバーではなく、職員であった(第3段階)。

1年ほど回収を通じて接触を重ねるうちに、近隣の人が直接メンバーに缶を渡したり、言葉をかけたりするように変化した(第4段階)。

さらに、近隣の協力者がメンバーの変化に気付き、声をかけることも見られるようになり、名前が呼ばれるようになってきた。新しい職員に対し、メンバーの様子の変化などを伝えることも見られるようになった(第5段階)。

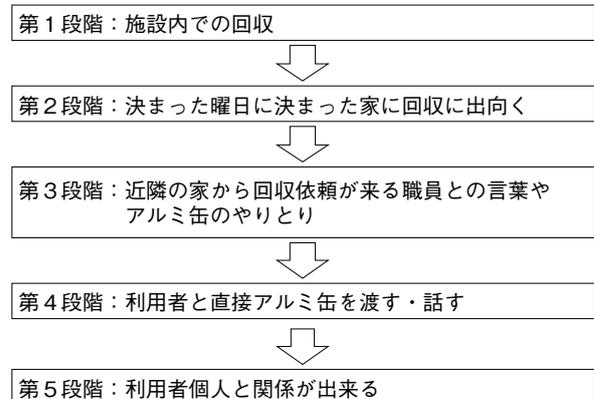


図2 アルミ缶回収活動の展開

これら、関係の変化と並行して、近隣協力者が施設の行事などの機会に施設を訪れ、アルミ缶回収以外の

場面でのメンバーの側面を知り、個人としての理解を深めることもうかがえた（「うちに来る時はいつも寝ているように見えるのに、ここではこんな顔をしているのね」といった発言など）。

4. アルミ缶回収活動の意味

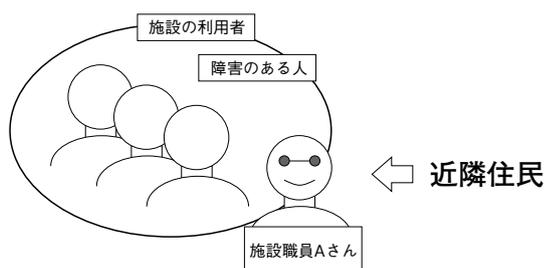
この活動を通して、もたらされたものを関わる人ごとに検討する。

個々のメンバーは、施設の中で他のメンバーや職員、ボランティアらから個人として認知されるだけでなく、近隣住民からも、施設利用者、障害者といった大きなくりから、名前を持つ人として認識されるようになった。これは、メンバー自身が積極的に働きかけた成果ではないかもしれない。職員の熱意に支えながらではあるかもしれないが、外出を拒否せずに受け入れ、他人と接触することを拒否せず、継続して行く中で、好きなおうち、好きな人を作っていたメンバーもある。また、活動を継続する姿によって、近隣住民を変化させた。これはメンバー自身の社会参加の力ととらえることが可能であろう。

職員にとっては、近隣住民とメンバーとの関係の深化が喜びであり、活動の意味を感じていた。また、その関係から、メンバーの新たな面を知ることもあったという。

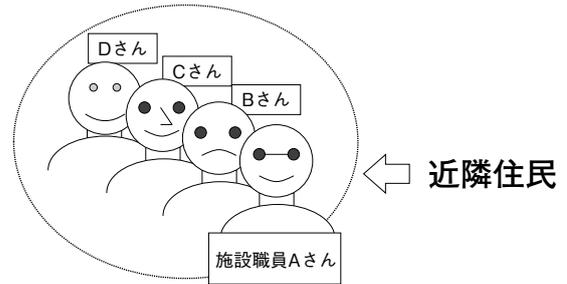
また、地域住民は、メンバーが、毎週近くに缶回収に来るとい活動の様子からその活動に関心を持ち、自分に協力できることを見出し、アルミ缶を提供するようになった。この時点では、「施設の利用者」と交流しようという意図はなかった人もいたものと思われる（図3）。それが回数を重ねることによって、職員を見ていた視線がメンバーに向くようになり、名前を持つ個人として認識するようになった（図4）。

これら、関わる人ごとに経験を通して、それぞれにもたらされた内面の変化は、「経験知」とみなすことが



職員Aさんのみ認識、メンバーは個人識別されない

図3 集団としての認識



職員Aさんだけでなく個々のメンバーを認識

図4 集団内の個人としての認識

できる。この経験知の蓄積によって、それぞれの関係が深まり、これは関係者それぞれの社会性促進が図られたとみなせる。同時に、この関係性が地域で暮らす姿の一形態といえるであろう。

5. 集団での作業活動の持つ意味

作業療法ガイドラインでは、作業活動を①生活活動、②手工芸等の活動（基本的動作・準備活動を含む）、③身体運動活動（基本的動作・準備活動を含む）、④仕事・学習活動、⑤生活圏拡大活動に分けている³⁾。また、山根ら⁴⁾は、いきる・くらす（日常生活）、はたらく・うむ（仕事）、あそぶ・つくる・たのしむ（遊び・余暇）、つながる・ひろがる（社会活動）、やすむ（休養・熟成）という言葉を用い分類している。さらに山根らは、集団は「普遍的体験による安全・安心の確認という基本的欲求と自己実現に向けた成長欲求により、ひとはひとを求めて集まる。そして他の人の協力を得て、自分ひとりでは出来ないことをおこなう」と述べている⁵⁾。また物理的な場所だけではなく、特定の時間と空間、あるいは「関係」の空間が場⁶⁾であり、集団で作られる場の作用によって、「その場をともに過ごす者同士の自然な交流も生まれ」「主体的な行動が回復する機会となる」としている⁵⁾。

これらに倣えば、空き缶回収活動は、空き缶をつぶすことに伴う変化を楽しむ「手工芸等の活動」、外出に伴う「身体運動活動」、グループメンバーとともにおこなう「仕事・学習活動」の要素を持ち、山根らの分類では、「はたらく・うむ」および「たのしむ」、ことを意図しておこなわれ、結果として地域住民と「つながる」ことにいたったと表現できるだろう。活動が集団でおこなわれたことによって、メンバーにとっても職員にとっても、継続する活動となり、協力を申し出た

地域住民にとっても、関係性が生まれる「場」となった、とみなせる。

また、先出のガイドライン³⁾では、作業療法の治療的応用の内容として「基本能力：運動、感覚・知覚、認知・心理」「応用能力：起居・移動、上肢動作、身辺処理、知的・精神的能力、代償手段の適用」、「社会適応能力：個人生活適応、社会生活適応、職業的適応、余暇活動」、「環境資源：人的資源、物理的資源」をあげている。

本研究で取り上げた活動は、作業療法の治療的応用の観点から見てみると、「環境資源」を用いて、「運動・認知・心理」面に働きかけ、「社会適応能力」向上がみられた、と表現できる。しかしながら、この活動の本質は、それにとどまらない。

当該施設において、重症心身障害者が職員に支えられ、集団で作業活動を継続することによって、単なる障害者の施設を利用している障害のある人から、名前を持った個人として、施設のある地域の住民との関係を構築していくことがみられた。通常の施設の行事などを通じた交流活動レベルでは、特定の個人として認めるところには至らないものと思われる。作業療法的立場に立てば、この個人が個人として認められることこそ、この作業における重要な意味があると考えられる。

この活動に「決まった日に決まった家にとりに行く」という要素を組み込んだことにより、外出の目的ができ、近隣住民に活動していることが見えるようになり、接触する他者の範囲が格段に広がり、「施設を利用する障害者」と見られるにとどまったかもしれない関係から名前を持つ個人として認識される関係に「つながる」ことの質的に変化をもたらしたと考えることができる。また、メンバー・職員・アルミ缶を提供する地域住民からなる新たな場が形成され、施設内にとどまった以上の場の力を発揮したといえる。

6. 知識科学的考察

今回の事例を組織的知識創造の枠組みを用いて考察する。

いわゆる「現場の知識」には、言語化されていない「暗黙知」が多く含まれている。たとえば、体験から得られる「経験知」などがこれに相当する。これら「暗黙知」は当事者間で活動を共に遂行する「場」において共有され、伝えられる（共同化）。いわゆる職人の技

の伝承がこれに相当する。この「暗黙知」を当事者以外にも通じる「形式知」とする（表出化）ことで、これらの知識は汎化が可能となると同時に、当事者自身にとっても経験知を明確にし、新たな目標設定や課題を発見することにもつながる。この「形式知」を活用・実践する段階（連結化）を経て、個人のスキルとして取り込んでいく段階（内面化）まで含めて、「知識創造」と考えることができる。こうした過程を知識の変換プロセス⁷⁾（図5）と呼び、こうしたプロセスを経て次の新しい知識創造が生まれスパイラルに発展していくと考えることができる。



図5 知識変換の活動

本事例では、施設内で活動をおこなっていた第1段階から、第2段階の外に出るように活動を変更したときに、外出活動を積極的に起こってきた経験から、メンバーが定期的に外出する体力があり、それを楽しむ力があることを抽出し、空き缶を受けとりにいく活動という形式知に表出化した。その表現形式である活動を地域住民が見て、自宅の空き缶の活用に気づき活動に参加する（連結化）第3段階への発展が見られた。参加することを通じ、地域住民にとり、単に空き缶を提供するだけでなく、メンバーと接触すること・知っていくことに活動の中身が変化し（内面化）、第4段階では直接交流するようになった（共同化）。このように、重度の障害を持った人の集団活動に、経験から得た知識を活用して工夫をしたことで、社会参加の質が変化したことを知識創造プロセスで説明できる。これは、集団で活動を継続的に起こってきたことによって引き起こされた。このプロセスはスパイラルであり、異なる表出化によって、異なる発展が期待できる。

この活動はまた、障害を持っていても暮らしやすい地域社会を作り出す展開をみせている。これは梅本⁸⁾の提唱する人々が地縁・知縁共同体として、デモクラシーを実践する最も身近なコミュニティーすなわち、知識創造自治体に相当するとみなすことができる。「思いを言葉に、言葉を形に、形をノウハウに」と表現される政策知創造のスパイラル・プロセス(図6)⁸⁾として捉えると、今回見てきた集団活動は、個人の体験から生じた思い(「暗黙知」)を具体的な活動として表現されている段階と考えられる。同時にこの活動に関わる人々の相互関係を生み出す場を構築しているために、知識創造プロセスが機能していると捉えられる。この活動を体系化し、ノウハウとすることで、他の施設の活動との比較・検討、他の施設での実践へと展開することが可能になる。それが次の体験を生み、次の創意工夫すなわち知識創造に繋がると考えられる。

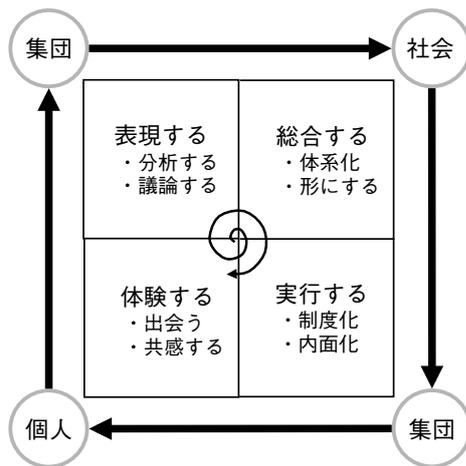


図6 政策知創造プロセス

今回、作業活動の用い方によって、社会参加のあり方に質的な変化をもたらすことを事例によってみてきた。活動当事者が暗黙知で実践してきた事柄を、研究の形で取り上げ形式化することで、活動の展開の意味が明確になった。これは本活動を無自覚的に経験で展開してきた組織に対する活動の妥当性を保証する正のフィードバックとなる。この意義付けを明確にすることで、当該施設の他のグループでも、この知識を共有化し活用できる。さらに、この経験を地域社業療法の知識に加えることで、作業療法の実践に対して貢献が可能であろう。同時に作業活動を用いる施設での暗黙知的におこなわれている実践を表出することにも貢献

しうる。

当該施設は、今回取り上げた以外にも、多くの実践をおこなっている。これらを、この組織で創造されている知識としての集団活動として、他のグループの活動に関して引き続き調査・分析を進め、今回の着想の当否を検証し、この施設の集団活動における知的創造を体系化し、一般化していく。さらにこれら当該施設に関する一連の研究を通し、他の施設の活動に活かせる知識として抽出・一般化を展開していく。

今回見てきた、地域住民との関係性の変化を促す作業活動および、障害を持って生活しやすい地域づくりに関わる作業療法という視点からも、今後調査・解析を進めていきたい。

【参考文献】

- 1) 世界作業療法士協会：作業療法の定義(2004) / WFOT Definition of Occupational Therapy (2004)
http://www.wfot.com/office_files/DEFINITIONS%20-%20DRAFT7Aug2005.pdf
- 2) 小川恵子、大熊明ほか：標準作業療法学 専門分野地域作業療法学. 医学書院(2005)
- 3) 社団法人日本作業療法協会編：作業療法ガイドライン 1996年版
- 4) 山根寛ほか：人と作業・作業活動. 三輪書店(1999)
- 5) 山根寛ほか：人と集団・場一人の集まりと場を利用する. 三輪書店(2007)
- 6) 遠山亮子：場. ナレッジサイエンス. pp30-31, 近代科学社(2008)
- 7) 遠山亮子：SECIモデル. ナレッジサイエンス. pp26-29, 近代科学社(2008)
- 8) 梅本勝博：知識創造自治体. ナレッジサイエンス. pp82-85, 近代科学社(2008)

